

Y P U L i b r a r y

Library of Yamaguchi Prefectural University

第3号 平成19年(2007年)1月 5日 発行

巻 頭 言

附属図書館長 市村 孝雄

あけましておめでとうございます。

図書館の赤レンガの壁に新年のやわらかい日差しがあたっています。狭いながらも静謐なこの大学図書館で過ごす貴重な時間を、ことしも享受いただけるよう願っています。

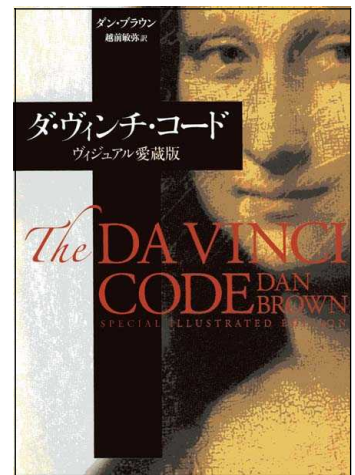
ここ数年来、図書館に足を運ぶ利用者の数が減少気味です。文献複写サービスの利用も減っています。一方、図書館で長い時間を過ごす真剣な学生の姿があります。本号 3 頁には図書館を愛する一学生の寄稿をいただきました。清新な感性に心を洗われます。是非ご一読ください。活字ばなれとIT情報依存の時代といわれて久しくなりますが、活字は健在ですね。「ダビンチ・コード」にも活字の力がありません。

さて昨年は、附属図書館として初めての利用者意向調査を行い、全学で6割の学生教職員から回答をいただきました。学部によっては、教授会の協力のおかげで8割の学生から回答をいただいたところもあり、日頃聞けない学生のリアルな声を聞くことができました。図書館サービスへの要望など、建設的な意見も沢山もらいました。11月には、集計結果を小冊子にまとめて学内に配布したところです。本号 3 ~ 4 頁には、その概要を紹介してありますのでご一読ください。

図書館には、もう少しゆとりのあるスペースと、いつも使える机、椅子、コンピューター、コピー機、AV 機器、空調設備などなど、もう少し充実した学びの環境が欲しいという声があります。専門書と参考図書をもっともっと増やして欲しいという学生の要望も聞こえます。文献調べと情報集めのために、夜間と土日の開館時間を延ばして欲しいという声もあがっています。施設設備の拡充、蔵書の充実、そして開館時間の延長が多くの利用者の願いだということが読み取れる結果でした。現状では、18万冊の蔵書の内6万冊だけが開架という狭隘なスペース、学生10人に椅子1席、100人に1台の情報検索端末、特別利用時の貸出し停止など利用上の不便が、なかなか解消しないまま積年の懸案となっていました。本学の貴重な歴史資料「寺内文庫」も、狭隘な書庫の一隅で光の当たる日を待っています。本号 2 ページには、この文庫に納められた夏目漱石「漾虚集」の解説記事を寄稿いただきました。本学研究者の手になる連載2回目、佳境です。ご一読ください。

情報検索の利便向上の一歩として、図書館は昨年、学内の端末からアクセスできる電子ジャーナル ProQuest を導入しました。また今年、ウェブ上で全文閲覧ができるいくつかのジャーナルコンテンツをローコストで配給してもらう交渉を進めています。また、日曜日の土曜日並み開館が来年度はできるよう、検討を重ねています。一方、図書開架スペース狭隘化の現状はなかなか解消しそうにありません。この方は、将来の施設拡充の全体計画にしっかり書き込まれることを期したいところです。

この亥年が、そのために力を蓄える一年となることを願っています。



目 次

巻頭言	1
(寄稿) 桜園寺内文庫収蔵資料から～夏目漱石著『漾虚集』(十一版)について	2
(寄稿) 図書館は私の活動場所	3
ミニ特集 - 附属図書館利用者アンケート	3
電子ジャーナル・オンラインデータベース	4
開館日・開館時間・特別利用	4
編集後記	4

(寄稿) 桜園寺内文庫収蔵資料から

～ 夏目漱石著『漾虚集』(十一版)について

国際文化学部 講師 加藤 禎行

『漾虚集』[ようきょしゅう] T913.6 N58 (桜園寺内文庫蔵)
 夏目漱石(著)/橋口五葉(装幀・画)/中村不折(画)
 明治三十九年五月十五日印刷/明治三十九年五月十八日発行/大正六年一月廿四日十一版発行
 大倉書店・服部書店発行、定価金二円二十銭。
 本製本総クロス装・天金・アンカット・菊判、22.4 cm × 16.0 cm。

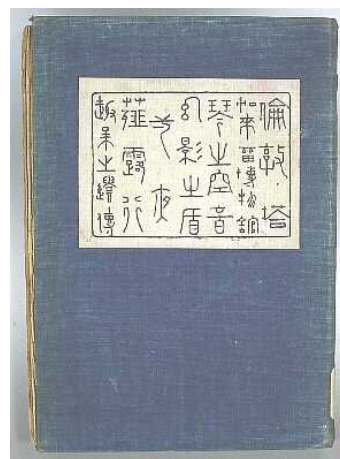
『漾虚集』初版(一九〇六 明治 39 年五月、大倉書店・服部書店)は、『吾輩八猫デアル』上篇(一九〇五 明治 38 年一〇月、大倉書店・服部書店)に次いで刊行された、夏目漱石の第二単行書であり、「倫敦塔」(『帝国文学』一九〇五 明治 38 年一月)、「カーライル博物館」(『學燈』同年一月)、「琴のそら音」(『七人』同年六月)、「幻影の盾」(『ホトトギス』同年四月)、「一夜」(『中央公論』同年九月)、「薤露行」(『中央公論』同年十一月)、「趣味の遺伝」(『帝国文学』一九〇六 明治 39 年一月)の七編を収録した短篇集である。

異郷体験を平明な文体で綴った「倫敦塔」「カーライル博物館」、英国のアーサー王伝説に取材し、艶麗な美文体で描き出された「幻影の盾」「薤露行」、幻想的で、神秘主義・心靈学への関心が色濃くうかがえる「琴のそら音」「一夜」「趣味の遺伝」など、本書収録の作品群からは、初期の夏目漱石が保持した浪漫主義的な文学傾向がはっきりと見て取れる。そしてまた本書を色彩った橋口五葉・中村不折のアートワークも、近代日本の装幀史・書物デザイン史に金字塔をうち建てたことで知られる。橋口五葉の、昆虫や植物・小動物を用い、優雅な曲線を強調したアールヌーボー式の意匠は、現在でも見るものの心を魅了するし、中村不折が淡い水彩画で描き出すヨーロッパの情景も、本書にとって大きな効果を与えている。しかしながら、桜園寺内文庫所蔵の『漾虚集』の価値は、決して手間とコストの掛かる造本美や、近代文学史上の価値にとどまらない。

一般に、近代文学資料の場合、初版本の市場価値が高く見積もられるが、研究上の価値は必ずしもそうではない。その資料が、いつまでその形態で刊行されていたのかという、出版の下限を意識する視点も文学研究においては重要だ。たとえば、本書奥付の刊記は「大正六年一月廿四日十一版発行」とある。予想を遙かに裏切る、この単行本『漾虚集』の息の長さに、わたくしはやはり戦慄する。

夏目漱石が『明暗』を未完のままに死去するのが、一九一六 大正 5 年一二月九日であり、おそらく、この十一版『漾虚集』は、大倉書店・服部書店が漱石歿後の書籍需要を当て込んで発行したものと思われる。桜園寺内文庫蔵の十一版『漾虚集』より遅く刊行されたものは未見だが、この十一版が菊判『漾虚集』の最終版である可能性が高い。というのもすでに、菊半截判『倫敦塔幻影の盾薤露行』(一九一五 大正 4 年九月、千章館)が刊行され、やがて三五判『漾虚集』(一九一七 大正 6 年十月、大倉書店)も刊行されていくというように、漱石の小説の読まれ方が、オリジナルプリントでの享受から縮刷版での享受へと移行していく時期に該当しているからだ。

本書奥付には、朱色インクで「定価金一円四十銭」と印刷されたうえに、青インクゴム印で「定価金二円二十銭」と価格訂正スタンプが押されている。十一版『漾虚集』に刻印された、八十銭の価格上昇を示すしるしが、同時に、本書のうえを経過し、本書が生き延びてきた十一年という時間の長さをも、雄弁に物語っているのだ。たしかに十一版『漾虚集』を手にとって見ると、橋口五葉による石版印刷の扉、中村不折によるコロタイプ印刷の挿画の刷りなど、やや不鮮明で版の痛みが見受けられる。しかしながら、そういった瑕疵など問題にならないくらいに、この十一版『漾虚集』の存在・残存それ自体が、漱石の享受史において重要な意味を持つことは、言うまでもない。



本書表紙書影



本書奥付。橋口五葉による意匠。

(寄稿) 図書館は私の活動場所

看護学部1年 黒崎亜希子

学生生活は、多くの本と出会うチャンスに恵まれています。本は毎日の課題やレポートの参考になるばかりでなく、授業で学んだことをさらに自分で追求していくのに役立ちます。そこから得た物の考え方は、自分自身の課題を乗り越えていくための重要な手がかりとなります。読書は私の成長、特に人間としての成長です。読書を積むことで理解力は増加し、必然的に表現力も身につきます。さらに、読書によって、既存の世界を再認識し、未知の世界を経験することで想像力や空想力が養われ、それが豊かになると推理力や応用力が身につきます。それらが本当の学力だと思います。

私は看護学科への入学により、一つの旅を始めたこととなります。この旅の過程で多くの人々と出会い、多くの冒険を経験すると思います。最初の段階では、将来ナースとして必要な非常に多くのことを学習します。ナースとして一人前になれば、多くの人をさまざまな形で助けることができます。この旅は、生涯の職業人生を通して続きます。時には、困難な道に遭遇することもあります。長い旅は非常にやりがいのあるものとなるでしょう。

看護とは、お金のためだけの仕事ではなく奉仕であり、一つの専門職です。それには、一定の知識と技能を与えてくれる教育が必要です。専門職は、常に最善を尽くし、自分の職務に対し強い責任感を抱いています。そしてそれは、周囲に重要な変化をもたらします。看護の対象は、赤ちゃん、子ども、成人、老人とさまざまです。健康な人、病気の人も対象となり、急性疾患の患者、慢性疾患の患者、また、死を迎えようとしている患者を対象とすることもあります。そのとき必要になるのが豊かな人間性であり、それは読書という間接的な経験の拡大によっても身に付けられるものだと思います。

看護棟の図書館には多くの専門書がそろっています。古いものから最新のものまで、何時間いても飽きることのない学習環境が整えられています。まだ一度も開かれたことのない本も多く存在しています。夢中になって本を読むことは、自分を忘れて没入することであり、想像の世界と出会う時間でもあります。私にとって図書館は、知的・精神的活動の場です。

ミニ特集 - 附属図書館利用者アンケート

アンケート調査を終えて

附属図書館では、本学の学生・大学院生・教職員の利用実態及びニーズを把握し、サービスの充実と向上、改善を図るため、平成18年7月にアンケート調査を実施しました。このような調査は初めてで、とまどうことが多々ありましたが、前期試験前の多忙な時期、全学の皆様にご協力いただいたお陰で、無事報告書の作成・配布を完了することができました。厚く御礼申し上げます。

回収率は全体で58.8%、中でも学部生は60.7%、職員は79.5%と意識の高さが伺えるものでした。

まず、利用者への最も基本的な質問である「情報入手の手段」については、「欲しい資料や情報を探したい時はまず、インターネットで検索し」同時に「図書館（本学図書館・公共図書館・山口大学図書館の順）に調べに行く」という回答でした。

次に、本学図書館の利用頻度は、月1回以上が49%、年に数回、あるいは利用しないが48%で、日常の学生生活で図書館を必要としている人とならない人は半々です。館内施設やサービスの満足度は「満足、ほぼ満足、どちらともいえない」が過半数を占めています。ただ、図書や雑誌の蔵書数に対しては不満の人が多くなっています。「小説をもっと揃えてほしい」とありましたので、今後意識して購入していきたいと思います。ただし、図書館が選書できるのは、毎年受入冊数・金額の30%しかありません。残りの70%は教員の方々の選書によるものです。蔵書構成のバランスが悪いと指摘されますが、大学図書館という性質上やむを得ない部分でもあります。

このように今回の調査で、日頃の利用実態を客観的に捉えることができ、同時に今後の課題も明らかになりました。大学図書館として整備必須の電子ジャーナルを充実すること、開館日・開館時間に関する点、この2点は早速、検討中で、次頁記載のとおりです。

その他の意見として、「建物自体が古くて狭隘」「本の配架場所がわからない」等、建物については現状ではどうすることもできませんが、本の配架場所については、利用者にわかりやすいように開架部分の書架の内容が一覧できる図を作成して掲示し、それを縮小コピーしたものを配布用に図書館の入口付近に置きました。

貴重なご意見に対し、できることから取り組んで今後の図書館運営に役立てていきたいと思っております。
(辻村)

電子ジャーナル・オンラインデータベース

「これからもっと利用したい電子ジャーナルは？」という問への回答があったのは、国際文化学部57%、社会福祉学部51%、生活科学部40%、看護学部83%でした。

看護学部では、医療系の電子情報源が豊富にあって日頃からよく利用されていることから、電子ジャーナル等への関心が非常に高くなっています。特に、医中誌、CINAHL、PubMedがよく利用されています。

国際文化学部と社会福祉学部では、現在 ProQuest が提供しているジャーナルのパッケージには希望の分野が含まれていないというのが実情のようです。より広い分野の多様なニーズをカバーする電子ジャーナルパッケージが現実的な価格で提供されることが求められています。

生活科学部でも同様の事情があるようですが、再編される新学部のニーズに見合うジャーナルパッケージが開拓されれば、関心ももっと高まるのではないのでしょうか。

公立大学の図書館は互いに共同して、電子ジャーナルを提供する大手出版社との価格交渉を続けていますので、期待に沿うものができたときには時期を移さず導入できるようにと待機しているところです。

次の2誌は、冊子体から電子ジャーナルに変更しました。

1月中にはそれぞれの Web Site から最新号を閲覧できますので、ご利用ください。(窪田)

- ・ [Journal of Bacteriology](#)
- ・ [The Journal of Biological Chemistry](#)

開館日・開館時間・特別利用

学部別不満度と特別利用の利用率

	開館日に不満がある	開館時間に不満がある	特別利用の利用率
国際文化学部	32%	37%	23%
社会福祉学部	25%	31%	13%
生活科学部	37%	38%	21%
看護学部	44%	61%	51%

自由記入意見の主なもの

- ・ 土日に開館して欲しい。
- ・ 開館時間を延長して欲しい。
- ・ 日曜日も特別利用したい。
- ・ 特別利用時間を延長して欲しい。
- ・ 特別利用の手続きを簡単にしたい。

考えられる改善策について

国際文化学部・社会福祉学部・生活科学部の学生は3割～4割が不満を持っているようですが、これらの学部は特別利用の利用率が低いので更に利用のPRと特別利用をしやすい環境に改善・充実する必要があるようです。

看護学部の学生は、すでに特別利用の利用率が高いので、特別利用時間内の利用環境の改善・充実を図っていく必要があると思われます。

これらを総合的に判断し日曜日の特別利用実施、特別利用の利用手続きの簡略化などを検討しているところです。(徳田)

編集後記

亥年の新春に、館報第3号をお届けします。本号はご寄稿に加え、昨年夏に実施した「附属図書館利用者アンケート」の調査結果をミニ特集で紹介しています。学内の皆様から図書館サービスについて、沢山のご要望をいただきました。

亥年の「亥」の字は「草木の生命力が種の中に閉じ込められた状態」を表しているとも言われます。これにあやかり、わが図書館のサービス改善、充実、向上の芽吹きにつながる年になればと思っています。次号は4月の発行予定です。(町田)